

## 会 員 の 声

### 一 つ の 提 案

服 部 正 策\*

現代のエネルギー多消費型社会の動向は最早引返すことは考えられず、世界の人口増加、人口1人当りの平均消費量の増加と相俟って、総エネルギー消費量は増加の一途を辿るであろう。現在ではそのエネルギーの源泉は専ら地球自体に存在する材料を掘起し、消費している状態で、所詮有限なものの喰い潰しであるから将来の需給バランスはどうなるのか、その結着は明かである。しかももっと近未来の時点にも既に問題がある。それは現在世界のエネルギー源の非常に大きな部分を石油に依存しているという体質である。特に日本は全消費エネルギーの90%まで国外から輸入しなければならぬのが現実で、この問題は特に大きい。

石油の価格、需給関係が如何に不安定で、脆弱なものであるかは1970年代2回にわたるオイルショックによってイヤという程痛感させられたことである。幸い日本はその破局的事態を旨く乗切って今日に至っているがいつ又同種のことが起るかも知れない。起らないという保証は何もない。幸い現在は原油価格は安値安定、供給は円滑に推移しているが、一説にはこの状態は85~86年が底で、その後価格は騰勢に転じ、今世紀末には原油1バレル当たり50ドルに達することも有り得るという予測もなされている。

今更言う迄もなく近未来、将来のエネルギー対策としては、省エネルギー・新エネルギー開発、エネルギー源多様化を図らねばならないという事は確固不動のポリシーである。所が不幸なことには現在の束の間の疑似安定状態がポリシー推進力を失わせている如く見える。この様な時機こそ何とかそのインセンティブを盛上げて行かねばならぬものと思う。

エネルギー技術開発の特徴は、一つの目標に対するアプローチが極めて広範囲且つ多種多様であることと、その多面性の為に個々の技術の境界的、学際的な接線、接面を共有する場面が多いことである。現状では学界、業界、研究機関などが夫々の立場でエネルギー問題に取り組んで居り、成果も上っている。しかしこれを総合

的に見ようとするとその成果発表があまりにも多方面、多岐にわたり過ぎて現状把握すら困難と言わざるを得ず、かくては夫々の部門のエネルギー問題に対処する立場や位置付けを評価することも困難であり、又他部門との接触面の把握、その結果として生ずる相互活用の道を探ることも難しい。もし之等を明かにする機会が得られれば、最終目標へのアプローチに一層適確な照準を付け得ることになるであろうし、相互の接触面を知って利用し合うことが目標達成の捷徑とする面が多々あると考えられる。研究の総合発表会があればこの目的に有力な場を提供することになるであろう。現在我国では各学会の研究発表会で、エネルギー部門を分離した項目としている学会はあっても各学会を通じた総合発表会といった形のもの出来ていない。

米国ではIECEC(Intersociety Energy Conversions Engineering Conference)の年次大会が毎年開催されて居り、今年はその20回大会が8月に開催された。その構成は有力な7学会、協賛4学会の連合体で、\*\*毎年そのうちの1学会が廻り持ちで大会を企画し、運用する。発表分野を約90項目に分け、それぞれの項目について責任担当者を決め、その人の責任に於て発表論文を調整する。論文の総数は500~600報に達している。

我国でもエネルギー関連技術の研究開発は非常に盛んであり、発表の場として各学会、講演会、専門誌など多数あるが、総合性については充分とは言えない。何処かが主唱して米国の例に見る如く“総合エネルギー研究会”とも謂うべきものが結成され、運営されることを望むものである。

エネルギー・資源研究会は規約に示す通り、“エネルギー・資源に関する諸問題を総合的に解決するために、産・学および官の緊密な協力関係を育成強化すると共に、……”を目的としている。本会の活動に更に一步を進めてこの種の会議の中核となり、関係他学会を総合して運営することはできないであろうか。現在の日本での最も適格性のある機関ではないかと私かに思うものである。

\* 湯浅電池(株)最高技術顧問

〒569 高槻市城西町6-6

\*\*p. 96参照